

論文

## 映画人鄭君里の話劇活動

楊 韜

〔抄 録〕

本稿では、鄭君里の話劇活動に関する包括的な考察を試みる。鄭君里は話劇人ではなく、映画人として認識されている故に、これまで看過されてきた鄭君里の話劇活動を明らかにすることが本稿の目的である。まず1920年代から1940年代までの鄭君里の話劇活動の全体像を、彼の舞台出演経験・執筆した関連論文や著書・西洋演劇理論の受容といった複数の側面から確認した。鄭君里が多くの舞台で役者として活躍する傍ら、幅広い関心をもって様々な芸術理論の研究も行った。多くの西洋演劇家による芸術理論にも高い関心を示し、とりわけロシア人演劇家のコンスタンチン・スタニスラフスキーに注目し、翻訳などを通して中国国内へ紹介した。日中戦争期において、「文芸抗戦」の課題に応じ、『論抗戦戯劇運動』という戦時下の話劇運動の在り方を論じる著作を出版し、それは同時期の同じジャンルの論説においても際立って優れているものと言える。話劇と映画の二種類の文芸ジャンルを交互に経験・活躍した鄭君里は、話劇と映画の間にある継承的な性格をはっきりと認識していた。

キーワード 鄭君里、話劇、文芸抗戦、コンスタンチン・スタニスラフスキー

### 1 はじめに

本稿では、鄭君里の話劇活動、とりわけ日中戦争期を中心に、その戦争下における話劇文芸理論の研究と実践への取り組みについて、包括的な考察を試みる。なお、新中国が成立した1949年以降の状況について本稿では触れないことを予めお断りしておく。

これまでの中国話劇史研究においては、鄭君里が言及されることはほとんどない。管見の限りでは、二十世紀80年代に出版された代表的な話劇通史である『中国現代戯劇史稿』（陳白塵・董健主編、中国戯劇出版社、1989）から、最近注目される『中国話劇百年典藏』（傅謹主編、全十五巻、人民文学出版社、2017）まで、これまでの主要な中国話劇史関連書物を確認し

でも、鄭君里を話劇人として論じるものは見当たらない。無論、これは鄭君里の芸術家としての評価が低いことを意味するものではない。なぜならそれは、基本的には鄭君里は話劇人ではなく、映画人として認識されているからだ。『中国電影大辞典』では、彼のことを「鄭君里（1911.12.6-1969.4.23）、俳優、監督」として詳しく紹介しているが、その紹介文のほとんどは彼の映画俳優や映画監督としての経歴に関するものであり、若き鄭君里の話劇活動に関してはわずかに言及しているのみである。その部分を抜粋してみると、「1928年に南国芸術劇院戲劇科へ入学。その後南国社へ参加し、『莎美楽』・『卡門』などの舞台を出演。1930年に左翼戲劇家聯盟に加入、『左翼戲劇家聯盟行動綱領』を起草する。「摩登社」や「大道劇社」に加入し、演劇活動に従事する。」<sup>(1)</sup>と基本的には1930年代までの状況にとどまっている。しかし、実際に鄭君里の話劇活動は極めて盛んであり、関連する成果、とりわけ理論的成果は大変豊富である。したがって、これまで看過されてきた鄭君里の話劇活動を明らかにすることがすなわち本稿の目的である。

本稿では、まず、1920年代から1940年代までの鄭君里の話劇活動の全体を把握するため、舞台出演経験・執筆した関連論文や著書・西洋演劇理論の受容といった三つの側面から整理する。次に、1937年～1945年の日中戦争期に特化し、この時期において鄭君里が行った戦時下話劇文芸理論研究を考察する。具体的には、1939年3月に出版した著書『論抗戰戲劇運動』の内容を精査し、そこで提示された範疇や主たる主張を分析する。最後に、話劇人であり映画人でもある鄭君里からみた話劇と映画の関連性について検討を行う。

## 2 鄭君里の話劇活動の全体像

まず、鄭君里が出演した舞台を年代順にまとめ、表1に示しておく。

表1 鄭君里の舞台出演一覧（1929～1945年）

番号	年日時	場所	題名	劇団名
1	1929年夏	南京半边街民衆教育館、曉庄師範	莎美楽	南国社
2	1929年夏	南京、上海寧波同郷会	莎美楽、火的跳舞など	南国社
3	1929年	復旦大学、大夏大学	小偷、愛与妒、乞丐与国王	摩登社
4	1930年上半期	上海芸術劇社	炭礦夫、小偷、愛与死的角逐、西線無戰事、阿珍	上海芸術劇社
5	1930年上半期	辛酉劇社	狗的跳舞	辛酉劇社
6	1930年上半期	復旦劇社	西哈諾	復旦劇社

7	1930年夏	戲劇協社	威尼斯商人	戲劇協社
8	1930年夏	中央大劇院	卡門	南国社、摩登社
9	1930年冬	南通	慳吝人、父帰	摩登社、上海芸術劇社
10	1931年2月	持志大学など各大学	街頭人、小儷	大道劇社、新民劇社
11	1931年春	南通	小儷	小小劇社
12	1931年3月	復旦大学、大夏大学	馬迪迦、阿萊城的姑娘、街頭人	大道劇社
13	1931年5月	持志大学	街頭人	大道劇社、光華劇社
14	1931年5月	暨南大学	阿萊城的姑娘、車夫之家	大道劇社
15	1931年6月	持志大学、同文書院	生之意志、街頭人	大道劇社、復旦大学時代劇社
16	1931年秋	中央大劇院	街頭人（「災区之外」へ改名）	大道劇社
17	1931年秋		江南美、美人魂	
18	1931年9月18日	各学校、工廠夜校	乱鐘、血衣	
19	1931年9月末10月初め		乱鐘、血衣、双十節、解放	大道劇社、暨南大学劇社
20	1931年10月	蘇州光明戲院、東吳大学	乱鐘、洪水、解放、生之意志、梁上君子など	大道劇社、曙星劇社
21	1931年12月		暴風雨中的七個女性	大道劇社
22	1931年末	上海商会	乱鐘、洪水	大道劇社、上海劇団聯合会
23	1932年1月28日	暨南大学	血衣、乱鐘、洪水	大道劇社、暨南大学劇社
24	1933年夏		出路	
25	1933年冬	俄国小劇場	兄弟	新地劇社
26	1934年夏	八仙橋青年会	揚子江暴風雨、警報	
27	1935年1月	上海舞台協會	水銀灯下、回春之曲	上海舞台協會
28	1935年6月		娜拉	上海業余劇人協會
29	1935年7月		回春之曲、洪水、復活、械闘	
30	1935年秋	金城大劇院	欽差大臣	上海業余劇人協會
31	1936年4月	南京世界大劇院	復活	中国舞台協會
32	1936年5月	新光大劇院	自由	星期実験小劇場
33	1936年6月21日	新光大劇院、湖社、星期実験小劇場	走私、秋陽、都会の一角	螞蟻劇団

映画人鄭君里の話劇活動（楊 韜）

34	1936年夏		賽金花	上海業余劇人協会
35	1936年11月	カール登大劇院	大雷雨	上海業余劇人協会
36	1936年12月	カール登大劇院	欲魔	上海業余劇人協会
37	1937年1月24日	カール登大劇院	醉生夢死	上海業余劇人協会
38	1937年2月下旬	南京中華大劇院	大雷雨、欲魔 （「黑暗的勢力」 へ改名）、醉生夢死	上海業余劇人協会
39	1937年4月		秦淮秋月	上演なし
40	1937年8月	蘇州、常州、鎮江 各地	放下你的鞭子、最 後一計、毒藥、三 江好	上海救亡演劇隊三隊
41	1937年11月 12～14日	南京	八百壯士、我們的 故郷	抗敵劇団
42	1937年11月19日 ～1938年1月	蕪湖、安慶、九江、 武漢	放下你的鞭子、最 後一計、秋陽、三 江好、八百壯士	抗敵劇団
43	1938年4月	武漢	為自由和平爾戰	
44	1938年8月1日	抗敵演劇隊成立式 典	宣伝	
45	1939年		一年間	新西北劇団
46	1939年		夜光杯	西北幹訓団芸術隊
47	1941年		狂歡之夜	西安西北鉄路職工劇団
48	1942年		蛻変	
49	1942年秋		水郷吟	中国万歳劇団
50	1943年		戯劇春秋	中国芸術劇社
51	1943年		祖国	中国芸術劇社
52	1943年4月		杏花春雨江南	
53	1944年		君子好逑、求婚	中国芸術劇社
54	1945年	北碚国立劇専	水郷吟	
55	不詳		乞丐与国王	

出所：『鄭君里全集 第八巻』253-256頁に基づき、筆者補足加工作成。

表1から分かるように、鄭君里の舞台出演は主に1930年代の前半までだが、大別すると三つの時期からなっている。まず、1920年代末から1930年代前半までは、多くの劇団に所属し、さまざまなジャンルの舞台を経験した。二十歳前後には田漢が主宰する南国社に所属し、活動を始めた。その後、南国社や摩登社のほか、大道劇社などの舞台で大いに活躍した。さらに、1937年以降は上海救亡演劇隊三隊に所属し、各地を移動しながら、抗日話劇の活動を続けた<sup>(2)</sup>。最後に、1940年代に入ってから、主に「大後方」と呼ばれる中国西南地域の各地で活動した。

この時期の鄭君里の話劇活動は舞台役者としての出演だけではなく、舞台監督も務めるようになった。なかでも、1943年に中国芸術劇社による『戯劇春秋』<sup>(3)</sup>の監督を務めたことは特筆に値する。

このように表1からは鄭君里の舞台役者としての活躍ぶりが見て取れる。しかし、実は1932年聯華影業公司の専属俳優となって以降、彼は『奮闘』・『大路』・『新女性』・『国風』など数々の映画に出演し、高名な映画俳優の一人として数えられ、『聯華画報』第5巻第10期の表紙(資料1)を飾ったこともある。また、1942年には『民族万歳』というドキュメンタリー映画の監督を務め、1947年に蔡楚生と共同で大ヒット映画『一江春水向東流』の監督を務め、この作品を世に送り出したことで大きな反響を得て、映画人としての地位を不動なものとした。故に、今日では鄭君里は映画人として位置付けられており、彼の話劇活動についてほとんど語ることがない。

資料1 『聯華画報』第5巻第10期の表紙に飾った鄭君里



出所：瀋芸編『聯華画報 第三冊』331頁。

次に、鄭君里が執筆した話劇芸術関連論文と著書を年代順にまとめ、表2に示しておく。

表2 鄭君里による話劇芸術関連論文と著書一覧

番号	題目	発表・刊行情報	区分
1	社会秋季大会会務報告	『南国週刊』1928年8月第4期	報告書
2	民衆劇、南国、及其他	『南国週刊』1929年9月第5期	論文

3	舞台装置の主潮	初出は『戯劇』1931年4月第2巻第5期、1944年10月「近代欧州舞台芸術底源流」と解題、『戯劇時代』第1巻第6期再掲	論文
4	中国戯劇運動発展的鳥瞰（1930-1931年）	『北斗』1932年1月第2巻第1期	論文
5	我的演戯経験自述	1934年7月31日『新聞報』	講演録
6	『街頭人』如何導演	『現代演戯』1935年第1巻第2期	論文
7	談表演	1936年1月31日、未発表手稿	論文
8	中国文化界為争取演戯自由宣言	『生活知識（上海1935）』1936年第2巻第9期	意見表明書
9	抗戦戯劇運動草案	『抗戦戯劇』1937年12月第5期	論文
10	演戯手記	『戦闘週報』1938年第12期	論文
11	論抗戦戯劇運動發展底不平衡	『読書月報』1937年第1巻第3期	論文
12	論抗戦戯劇運動★	重慶生活書店1939年3月初版	著書
13	辺疆各族演戯問題	『戯劇崗位』1941-1942年第3巻第3-6期	論文
14	如何建立現實主義的演戯体系座谈会	『戯劇崗位』1942年5月第3巻第5・6期	座谈会記録
15	史旦尼斯拉夫基『演員自我修養』札録	『中蘇文化雜誌』1943年第13巻第7-8期	論文
16	近代欧州舞台芸術底源流	『戯劇時代』1944年10月第1巻第6期	論文
17	從頭學習史旦尼斯拉夫基体系	『文芸報』1957年第33期	論文
18	甚麼叫做現實主義	未発表手稿、年代不詳	論文
19	人体構造底特点	未発表手稿、年代不詳	論文
20	舞台上的刺激与反応	未発表手稿、年代不詳	論文
21	表演芸術底三種不同的出發点	未発表手稿、年代不詳	論文
22	戯劇底起源	未発表手稿、年代不詳	論文
23	芸術与現實	未発表手稿、年代不詳	論文

出所：『鄭君里全集』に基づき、筆者作成。

表2から分かるように、鄭君里の話劇芸術に関する関心はかなり広い。舞台装置やパフォーマンス、演劇とリアリティーの問題、抗日戦争期の話劇運動、コンスタンチン・スタニスラフスキー（Stanislavsky, Konstantin=康斯坦丁・斯坦尼斯拉夫基）の演劇理論など、様々なテーマや側面から話劇芸術を論じ、鄭君里なりの多彩な芸術論を提起している。このなかで、とくに重要だと判断するのは抗日戦争期の話劇運動に関する論考である。これについては次節で詳しく見てみたい。

最後に、鄭君里の西洋演劇理論受容について、コンスタンチン・スタニスラフスキーに関する紹介や翻訳を中心に触れておきたい。近代以降の中国では、ヘンリック・イブセンを初め、ジョージ・バナード・ショー、オスカー・ワイルド、ロマン・ロランなど、多くの西洋劇作

家・演劇家による著作が読まれ、受容されていた。鄭君里も例外ではないと思われるが、彼はどのような演劇家たちから影響を受けたのか。1944年10月、鄭君里は『戯劇時代』第1巻第6期に論文『近代欧州舞台芸術底源流』(表2の16番)を発表した。論文の内容及び文末の参考文献一覧から、鄭君里は以下の人物たちの研究を参照したと思われる。即ち、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(ドイツ)、エドワード・ゴードン・クレグ(イギリス)、ゲオルック・フックス(ドイツ)、ジャック・コポー(フランス)、オット・ブラーム(ドイツ)、アーサ・カハネ(オーストリア)、ウェルド・フランク(アメリカ)などである。このなかで、鄭君里が最も注目したのはロシア人演劇家のコンスタンチン・スタニスラフスキー(Stanislavsky, Konstantin)である。

鄭君里はスタニスラフスキーの代表的な著作を翻訳し、所謂「スタニスラフスキー・システム」を中国の読者へ紹介した。後に『文芸報』1957年第33期に発表した回顧文「從頭學習斯坦尼斯拉夫基体系(最初からスタニスラフスキー・システムを学ぶ)」(表2の17番)の中で、鄭君里は次のように当時の状況を述べている。「スタニスラフスキー氏の『演員自我修養』の英語抄訳本は1836年(ロシア語版原書は1938年出版)に出版された。」私は、1937年春この本に基づき第1・2章を翻訳し「一個演員の手記(一人の俳優の手記)」と題して上海の『大公報』に発表した。8・13事変が勃発後、救亡演劇隊とともに出発したため、やむを得なく翻訳作業を中止した<sup>(4)</sup>その後、1939年に鄭君里は章泯との共訳計画を立ち上げ、戦乱のなかで万難を克服し、ようやく1943年7月に全書の翻訳を終え、重慶で出版することができた<sup>(5)</sup>。また、1943年、『演員自我修養』から一部を抜粋し、「史旦尼斯拉夫基『演員自我修養』札録」(表2の15番)と題して『中蘇文化雜誌』第13巻第7-8期にて紹介した。鄭君里と章泯共訳の『演員自我修養』は戦後になっても幾度も重版され、その演劇教育における重要性は広く認識され、影響は今日続いている。

### 3 戦時下における話劇文芸理論の研究と実践

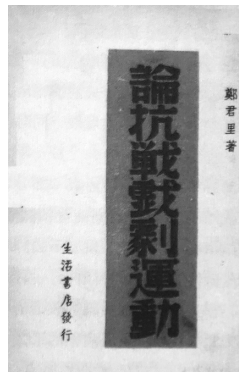
1937年の日中全面戦争勃発以降、「文芸抗戦」は「軍事抗戦」や「経済抗戦」と並んで中国側における抗日戦争戦略の重要な一環となった。多くの文化人・知識人は内陸部への移動並びにそれに伴う苦難を経験しながら、戦時下の芸術を再考するようになった。鄭君里も戦時下の話劇文芸に関する研究と実践を続け、その思考を深めた。ここでは、彼の戦時下文芸研究の集大成とも言える『論抗戦戲劇運動』(資料2)をピックアップしてみたい。

『論抗戦戲劇運動』は1939年3月に重慶生活書店から出版された芸術論の専門書である。この本は四章からなるが、以下その全体構成と内容を精査しておく。第一章「導論」では、「運動的本質」・「進歩性的根拠」・「抗戦戲劇運動發展的不平衡」の三節が設けられている。全書の枠組みを説明するため、最初に抗戦演劇運動を「現代劇(話劇)を中心とする」運動と定義し

た。この運動において、他の形式の演劇（伝統劇・雑劇・歌劇など）を取り込み、さらに改造を経て、抗戦のニーズに対応させる。また、広い国土において各地域間の話劇運動の不均衡の問題を提起し、如何に完全な芸術体系を作り上げるか、そのことの重要性を訴えた。このような問題提起に呼応するように、第二章から第四章まで、テーマ別に検討しさらに提案するように論を展開している。第二章「戦区演劇」では、「陣地上的演劇」と「軍隊里的演劇」の二節が設けられている。この章では、主に前線や軍営といった特殊な場所（空間）において、第一線で戦う兵士たちを中心とする特殊な観衆に向けての話劇活動の仕方を論じている。危険性が伴うという共通した二種類の環境だが、周辺の自然環境に適した演じ方や短時間でも完成できるようなパフォーマンスなどが求められるという。第三章「敵後演劇」では、「遊撃区和抗日根拠地」と「敵拠区的演劇」の二節が設けられている。この章では、主に日本軍占領地域（租界を含めた淪陷区も）における運動の展開の仕方を論じている。根拠地などでは、ゲリラ戦のような小規模な運動が有効である。租界が存在する大都市では、その複雑な勢力が混じり合った特殊空間にある隙間（グレイ・ゾーン）を利用することが重要である。また、実施する際、難民救助や失業者救助などの諸活動との連動も必要であると力説している。第四章「後方演劇」では、「内地鄉村」・「大城市的演劇」・「辺疆或少数民族」の三節が設けられている。この章では所謂銃後の地域を対象としているが、まず農村地域では伝統劇など土着性の強い芸術形態の有効利用やローカル・コミュニティとの緊密な連携は欠かせないと主張する。続いて大都市では、商業的演劇ビジネス・アマチュア演劇・行政機関や研究機関における演劇活動などの相互連携の必要性を指摘する。最後に、辺疆或いは少数民族が多く住む地域では、独特な文化や宗教信仰から生じる特殊な事情に対する注意喚起をしている。

日中戦争期において、戦争と文芸に関する議論や検討は多くの知識人によって盛んに行われた。その成果として発表・出版されたものも多数見られる。鄭君里の『論抗戦戲劇運動』は、その視野の広さ・内容の豊富さ・論点の多様さ・論拠の具体さ・論述の洗練さなどからみて、極めて完成度の高いものであり、同時期の同じジャンルの論説においても際立って優れているものと言える。

資料2 『論抗戦戲劇運動』（1939年初版）の表紙



出所：『鄭君里全集 第一巻』64頁。



#### 4 話劇と映画の関連について

すでに冒頭で述べたように、鄭君里は近代中国文芸史上において「映画人」として評価されていることは一般的なコンセンサスである。しかし、これまでの検討から分かるように、彼は「映画人」としてのキャリアと地位を築く前に、「話劇人」であった。では、話劇と映画の二つの分野で活躍した彼は、二者の関係をどのように考えているのか。ここでは、鄭君里が書かれた文章から彼の認識を探ってみたい。

鄭君里は1933年9月の『戯』創刊号に『從舞台到銀幕（舞台から銀幕へ）』という短文を發表し、彼自身の舞台役者から映画俳優への転身の心境を綴っている。この時点では、鄭君里は今後自分がどのような俳優になっていくのか、ということに対して少し茫漠としているように捉えているように見える。その後、鄭君里は1935年に『聯華画報』第5巻第9・10・12期と第6巻第2・4・5期に「再論演技（演技を再考する）」と題した連載論文を發表した。そこでは、鄭君里は「どの国の映画史においても、映画は最初から戯劇の遺産を引き受けながら発展してきたものだ<sup>(6)</sup>」と述べ、映画における演技を論じる際、舞台演技と一体化させた議論が必要だと指摘している。この連載論文のなかで、演劇と映画の異なる点を明白に認識したうえで、二者の分割不可の特性並びに継承的性格を論じている。

話劇と映画の二種類の文芸ジャンル、その両方を経験している鄭君里にとっては、基本的に二者の間にあるのは「承前啓後」といった関連性だろう。すなわち、「文明戯」から始まった中国話劇に携わった多くの先人たちの後を受けて、中国映画の発展する端緒を開いたことである。実は、1930年代半ばから活動の中心を話劇舞台から映画へ移した鄭君里だが、1940年に入ってから再び話劇活動に力を入れるようになったきっかけは意外なものだった。それは、太平洋戦争が勃発した後、鄭君里が滞在していた重慶や桂林などの各地ではネガフィルムの供給が断たれ、映画関連の仕事は中止に追い込まれるという事情だった。映画関連の仕事ができないため、鄭君里は再び話劇活動に従事したのである。「『演員自己修養』の翻訳作業を再開して全体の調整をする。「中華劇芸社」で心得を懇談する。『演員与角色（俳優とキャラクター）』を執筆し、『戯劇月刊』に掲載する。……」<sup>(7)</sup>おそらく、話劇と映画のそれぞれの物理的・空間的な制限について、鄭君里は最もよく体験し、理解できていたのだろう。

資料3 戦時下桂林滞在中の鄭君里



出所：『鄭君里全集 第三卷』巻頭写真

## 5 結びに

以上、本稿ではまず1920年代から1940年代までの鄭君里の話劇活動の全体像を、彼の舞台出演経験・執筆した関連論文や著書・西洋演劇理論の受容といった複数の側面から確認した。鄭君里が多くの舞台で役者として活躍する傍ら、幅広い関心をもって様々な芸術理論の研究も行った。多くの西洋演劇家による芸術理論にも高い関心を示し、とりわけロシア人演劇家のコンスタンチン・スタニスラフスキーに注目し、翻訳などを通して中国国内へ紹介した。日中戦争期において、「文芸抗戦」の課題に応じ、『論抗戦戯劇運動』という戦時下の話劇運動の在り方を論じる著作を出版し、それは同時期の同じジャンルの論説においても際立って優れているものと言える。話劇と映画の二種類の文芸ジャンルを交互に経験・活躍した鄭君里は、話劇と映画の間にある継承的な性格をはっきりと認識していた。

鄭君里は生涯にわたって大量の芸術関連論文を書いた。それは今日から見ると、主に話劇と映画に関するものである。彼が独自に構築してきた複雑な「芸術的知の構造体」は、彼自身の豊富な経験に基づくものであるため、明解なものが多い。また、彼が残したこれらの成果は、別の角度から考えると、近代中国の話劇界や映画界の貴重な記録としても看做すことができる。本稿で行った検討に限って見ても、そこから当時の中国話劇人たちの思想的軌跡、さらには「中国話劇」という文芸ジャンルの生成・発展・確立・成熟の一連の変遷を垣間見ることができる。

〔注〕

- (1) 『中国電影大辞典』、1340頁。
- (2) 戦時下の移動演劇隊については、拙稿（2015）を参照されたい。

- (3) 『戯劇春秋』については、拙稿 (2019) を参照されたい。
- (4) 『鄭君里全集 第三巻』、138頁。
- (5) 『鄭君里全集 第三巻』、139頁。
- (6) 『鄭君里全集 第三巻』、187頁。
- (7) 『鄭君里全集 第八巻』、223頁。

〔文献一覧〕

〈日本語 (五十音順)〉

- スタニスラフスキー著・山田肇訳『俳優修業』(未来社、1956)  
スタニスラフスキー著・蔵原惟人・江川卓訳『芸術におけるわが生涯 上・下』(岩波書店、1983)  
楊韜「八千里路雲和月：戦時下移動演劇隊の実態と表象」『中国言語文化研究』15、101-132頁、  
2015  
楊韜「戯劇春秋長夜行：近代話劇人の生態縮図」『中国言語文化研究』19、81-98頁、2019

〈中国語 (ピンインローマ字順)〉〈中国語 (ピンインローマ字順)〉

- 陳白塵・董健主編『中国現代戯劇史稿』(中国戯劇出版社、1989)  
傅謹主編『中国話劇百年典藏』全十五巻(人民文学出版社、2017)  
劉平『中国話劇百年図文志』(武漢出版社、2007)  
瀋芸編『聯華画報 第三冊』(天津古籍出版社、2016)  
宋宝珍『中国話劇史』(北京三聯書店、2013)  
田本相主編『中国話劇百年図史』上・下(山西教育出版社、2006)  
田本相主編『中国話劇芸術史』全九巻(江蘇鳳凰教育出版社、2016)  
張俊祥・程季華主編『中国電影大辞典』(上海辞書出版社、1995)  
鄭君里『鄭君里全集 第一巻』(上海文化出版社、2016)  
鄭君里『鄭君里全集 第二巻』(上海文化出版社、2016)  
鄭君里『鄭君里全集 第三巻』(上海文化出版社、2016)  
鄭君里『鄭君里全集 第八巻』(上海文化出版社、2016)

〔付記〕

本稿は、科学研究費【基盤研究 (A) 『建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ：戦時期からの継承と展開』(研究代表者：星野幸代)】の研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

(よう とう 中国学科)

2019年11月15日受理